

8-5. 強度向上を図る施工方法の例

今後新たに設置される浄化槽は、必要に応じて地震や水害等の災害発生に備えて、耐震性や水圧等に対する耐性を高める工法により施工されることが提案される。

避難場所に指定される施設に設置される浄化槽や、各市区町村のハザードマップにおける該当地区等、特に被災する可能性が高いことが予想される地域(傾斜地、埋立地、低地、沿岸部、山間部など)に新設される浄化槽については費用対効果を踏まえた十分な検討が必要である。

地震や洪水への耐性の向上を図る工法を以下に示す^{【参考文献③、⑤、⑬】}。なお、これらの工法はあくまで強度向上を図るべく提案されるものであり、耐震性の向上等について技術的に検証されたものではないことに留意する。

- 槽本体を浮上防止金具等で固定し、さらにロッド取り付け部が破損しないよう補強する(基礎からの転倒、落下、流出を防ぐ)
- 電気ケーブルを電線管等で保護する(漏電等を防ぐ)
- 支柱工法、コンクリートボックス工法等により施工する(強度を向上させる、浮上を防止する; 図8-5-1 参照)

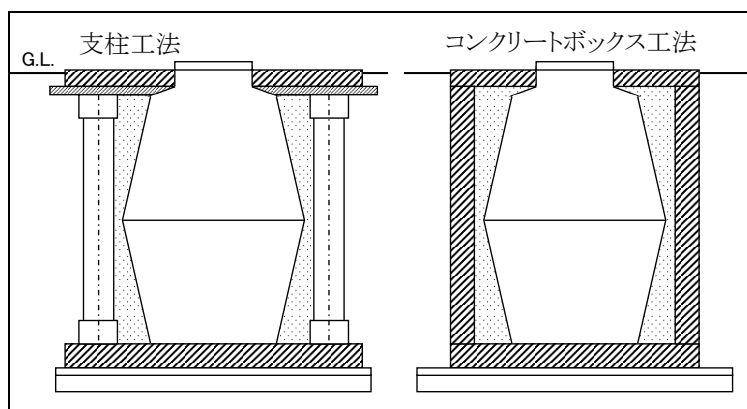


図8-5-1 補強工法の例(耐震性の向上が技術的に検証された工法ではない)

- 嵩上げは浄化槽メーカーの純正品、または推奨品を用いて行う(亀裂等の発生率を低減する)
- 管渠の接続部分を可撓(かとう)継手により連結する(亀裂等の発生率を低減する; 図8-5-2 参照)
- ハザードマップを参照し、浸水した場合に想定される高さよりブロワの設置位置を高く、かつその基礎を強固に固定する(ブロワならびに基礎の流失を防止する)

○マンホールの蓋の上に鉄板を置き、ボルト等にてスラブに固定する(マンホールの蓋の流失を防ぐ)

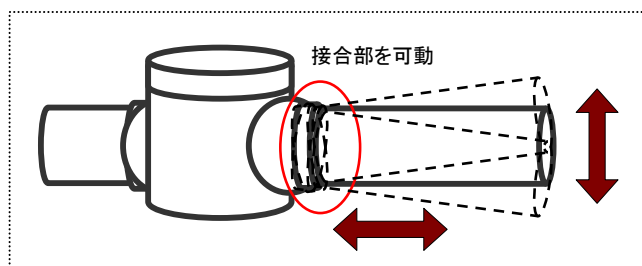


図 8-5-2 可撓（かとう）継手の例